

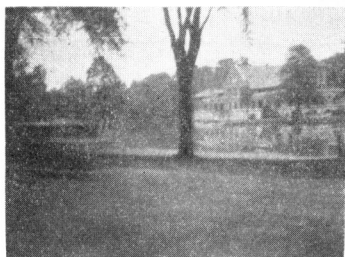
Title	北米旅行記(4) (皇太子御降誕奉祝)
Author(s)	山本, 一清
Citation	天界 = The heavens (1933), 14(153): 111-116
Issue Date	1933-12-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/165462
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

北 米 旅 行 記 (4)

山 本 一 清

(17)

七月三日朝4時10分、オルバニ着。餘りに早や過ぎるので、Washington 公園やら天文臺あたりを逍遙し、7時25分發の汽車に乗つて、南行、正午前の11時30分、ニウヨーク市の第125街停車場に着、62 W. 124th の國米氏方に泊ることとなつた。



オルバニ市ワシントン公園

ニウヨークでは博物館を訪ねることと、YMCA の本部に Herschleb 氏を訪ねることとの以外に用事は無い。ちょうど明日は米國獨立祭で、國を擧げての大祭日であるから、オフィスの用事は皆駄目となる。

此の日、午後、早速に博物館を訪ねたが、會ひたい Fisher 氏は不在。それから YMCA に Herschleb 氏を訪ね、近日フィラデルフィヤでワナメカ家を訪れるについての盡力を依頼し、明後日の再會を約して辭去した。

翌七月4日は獨立祭。午後から down-town を散歩して見たが、何も面白いことは無し。夜、おそくまで同宿の人々と話した。

次の七月5日は、朝 YMCA に Herschleb 氏を訪ね、フィラデルフィヤ訪問の打ち合はせなどし、それから Tokyo-Tei といふ日本料理屋で御馳走になつた。十年前と異り、ニウヨーク市の中央に日本料理屋が多くふえたことを見て、驚く！

午後、再び博物館を訪ね、運よく Clyde Fisher 氏に面會。近く出来るプラネタリウムの設計やら、其の他多くの新設備を見せられた。此の博物館が世界最大級の隕石や隕鐵を澤山持つてゐるのは、幾度見ても、美しい心地がする。

(18)

七月6日愈々ニウヨークを去ることとし、荷物を調べ、正午ペンシルベニヤ停

車場から乗車、午後2時にフィラデルフィアの中央停車場に着。こゝでも亦、九年前の宿を求めて、Hotel Adelphia に泊る。

フィラデルフィアでは、京都の三條青年會からのメツセージを携へて、ワナメーカ百貨店を訪ねたが、折よく支配人 Nevins 氏が居られたので、小一時間ばかり面會し、京都 YMCA 其の他の話をした。それから秘書に案内されて、新築の陳列館を見、御土産にとて、大きく、美味さうなチョコレート・カaramelの箱を二つも頂戴して、辭去した。

フィラデルフィアでは、有名なフランクリン學院が、近頃から天文學部を創設し、目下ピッツバークの Fecker 工場で可なり大きい望遠鏡を製作中であること、又、民衆教化のため、プラネタリウムを建設する計畫など、かねてから聞いてはゐたが、未だ何の業績も發表してゐない現状であるし、尙ほ、自分は今回餘假が無いので、學院の訪問は止めたのだつたが、あとでワシントンで聞いた所によると、プラネタリウムは殆んど完成に近いのであるといふ話であつた。それならば、態にでも、見て來るのであつたものと、残念に思つた。

(19)

何だか早くワシントンまで行つてしまひたくて、——7月7日朝7時20分發といふ汽車に乗り、フィラデルフィアを出發。途中、ボルチモア市の盛んな狀況を車窓から眺め、其の昔、太陽スペクトルの標準的波長決定をやつた Rowland 教授と、其の Johns Hopkins 大學などを胸中に書きながら居るうち、(又、永く交誼を持ち、今春逝去した黃道光の熱心家 Glanville 老人の居た New Market, Md. あたりを、東南の車窓に見送りながら、)10時30分にワシントンのユニオン停車場着。着くと、又、一刻も早く、約束の Brasch 博士に會ひたくて、荷物は停車場に預けたまゝ、ホテルの交渉なんか後まわしとして、大急ぎ、カピトル裏のコンGRES図書館を訪れた。此の大図書館も、9年前に來たことがあるので、度胸がすわり、何の憶するところもなく、受付の奥までツカツカ入つて、首尾よく、目的の Brasch 氏の室に入つた。

何故、こんなに燥しく、又、度胸よくコンGRES図書館に突進したかと、自分にも不思議なくらゐであるが、其の理由の一は、ワシントン滞在を3日間

と豫定してゐるのに、明日が早や土曜、明後日が日曜であつて、グズグズすると會いたい人に會へない心配があるのと、今一つ、停車場へ着いたのは標準時10時30分だが、之れは即ち、サマ・タイムの11時30分で、其れがためにも、ウツカリすると、午前中をフイにしてうかも知れないと考へたからである。——ところが、ブラシ氏に會つて、いろいろ話して見ると、ナーンの事だ！ ワシントンは、さすがに他の都市より超然として、馬鹿々々しいサマ・タイムなんか使用せず、堂々と標準時を其のまゝ使つてゐるのだ。之れで、ワシントンは大に吾が輩の氣に入つた、と同時に、午前中、樂々として人と會ふことが出来たといふものである。

數日前、アンナボアの湖邊で會つて置いた此のブラシ氏と、今日の會見は、誠に心の奥底から楽しい時間であつた。氏は年來、理學史研究の専門家であり、自分とは、手紙の上で五六年前からの知り合ひであるし、彼我互ひに史的研究論文の交換など、かなり以前からやつてゐる間柄である。自分は此の日、ブラシ氏に、去る2日ケンブリヂで Sarton 氏と會つた話、其の時に見えた國友能當の話、日本に於ける理學史研究の現状等々を語り、ブラシ氏は亦、近頃の諸研究の事や、此のコンGRESS圖書館とスミソン學院との關係など、かつて自分が聞きたいと思つてゐた事を種々話してくれた。

其のうちに食事時となつたので、ブラシ氏は食堂に自分を案内するといふ、『今日は、館長や諸部長と一所に會食する定例日ですから』との話。長い廊下やエレヱタを上り下りするうち、Putnam 館長や其の他の部長たちに會ひ、紹介されるまゝに、廊下で初對面の挨拶。其のまゝ、連れ立つて食堂に入る。——食事の一小時間、上品で溫厚な館長と、親切なブラシ氏其の他にもてなされて、誠になごやかな、眞にアト・ホームの感じの良い食卓であつた。『不景氣』、『不安』、『スピード』、『競争』、『戰雲』等々、今の世の中に流れるこうした風潮を外にして、此所は全くの落ち付きと、學究的なアトモスフィアのみに満ちた、時代離れの一廓であつた。

食後、ブラシ氏は此の大圖書館の隅から隅までを案内された。建國の最初からの寶物的ドキュメントや、珍書珍物、また、日本や支那、インド等々、世界各地より集められた圖書の數々、そして、此等を、誰もが最も自由に、

又、最も便利に閲覧し得るやうに出来てゐる。主な書物は、書架から讀者へ、すべて自動的に出されたり、收納されたりする仕掛けも面白かつた。

（ 20 ）

午後3時半までコングレス圖書館にブラシ氏の應接を受けてゐた自分は、辭去して、教へられた通り、ジョジタウン行きの電車に乗り、一二度の乗り換えに、やはり九年前と同じ失敗をくりかへしつゝ、海軍天文臺へ行つた。以前には、此のあたり、全くの場末で、淋しい田畔道を歩いたのだつたが、今來て見ると、全く見違へるやうに、サークルへの街路も美しくなつて、附近は立派な住宅街と化してゐる。

しかし、天文臺の構内は昔しと少しも變つてゐない。本館を背景として、子午線室や、寫眞天頂儀室、大ドーム、小ドーム等々。見慣れたものばかり。今日は、も早や時刻も午後4時を過ぎてゐるので、或は誰も會へないか知れないと思ひつゝ、既に案内を知つてゐる氣安さに、裏口から本館に入り、受け付け君に、『Robertson さんに會ひたい』と申し込んだ。幸ひ、目的の Robertson 氏は、まもなく、觀測室から自室に歸られた所を御目にかゝり、六月にシカゴで會つた以來の挨拶をし、例の1934年初の太平洋上の日食に關する話などした。こんどは、流石の大米國も、國を擧げての不況時代で、今までは決して一つも缺かさず、世界中、どこの日食觀測にも出かけた此の海軍天文臺が、明年の日食には、費用皆無で、恨めしくも觀測を斷念する様子である。しかし、シカゴででも、今日このワシントンででも、自分は『いよいよ斷念ですか？』と、駄目を押して見ると、いかにも口惜しげに、それでも、Robertson 氏は、『イヤ、全く棄てたわけではありません。未だ多少の望みはありますので、目下、極力、政府に奔走中です』と言はれるのだつた。

時刻が遅いので、ほかには誰も居ないらしく、Robertson 氏も何だか歸り仕度らしいので、長居は御氣の毒と思ひ、自分は5時に天文臺を辭した。出口の所で、自分は門衛に、『Ritchy さんは？』と、尋ねて見たが、此の頃、Ritchy 氏は不在だとの返事だつた。九年前、パリで出會つて以來であり、目下、此の天文臺で新型の大反射鏡を研磨中なので、是非、會ひたいものだと思つてゐたのだが……………どうも、こんどの旅行は、シーズンが悪くて、至るとこ

る不在々々だ。

今夜は、G 街の YMCA にとまる。

（ 21 ）

翌8日は土曜日である。早く銀行へ行き、それから轉じてスミソン學院に、天文臺長 C. G. Abbot 氏を訪ねた。此の人は、二十年も前から、毎年夏にカリフォニヤ又は他へ避暑旅行に出かけるらしいので、或は今日も不在かと思つてゐたが、豫想は當らず、氏は學院のオフィスに居られたのは嬉しかつた。時節柄、此の學院だつて、不況の風に吹き荒されてゐるわけで、今年は避暑の旅費にも事缺いでゐるのではないかとさへ、自分は考へた。——とにかく、Abbot 氏に會へたのは非常な幸ひ。暫くバールに待つてゐると、氏はニコニコ顔で出て来て、十年ぶりの挨拶をする。自分は、いきなり、太陽熱の研究に話題を向け、去る1932年中、自分が同氏の研究事項を日本の學俗界にくりかへし紹介した事を話したので、氏は大に喜ばれたが、氏が、太陽熱の變動に、68ヶ月を始め5種類の週期を發見されたといふ論文要旨は、最近又々進展して、今では總計7種の變動週期を認めてゐるといふ話であつた。

スミソン學院を辭去して、自分は隣接のフリーヤ美術館を見、それから更に同じ道を傳つて、National Museum を見た。こうして、此の日は後半日を専攻のサイエンスから離れて、ユツタリした心地で過した。

夜には又、H街で猛烈な戦争映畫を見た。

（ 22 ）

日曜をワシントンに滞在して限りある日程を後らすの事不利なるを昨夜來考へた自分は、7月9日朝早くホテル・コンチネンタルを出で、7時45分發の汽車に乗り、次ぎの行先きピッツバグに向ふ。——今までは大抵二度目の旅程であつたのだが、今日の汽車がボルチモア市を出てからは、ピッツバグ、コロンボス、シンシナチ……と向ふ先々が皆全くの初めての線を行くのであるから、特種な喜びと珍らしさで、心は躍る。

ピッツバグ着は午後6時5分。從つて、殆んど晝間の全部を今日は車中で費す。そして、車の通る所は主としてペンシルベニヤの工業地域で、至る所、鐵と石炭である。米國工業の中心地帯である。同時に又、此の日は車に乗つ

たまに、Allegheny 山脈を曲折して横切るのである。今まで見なれた廣い平野は消えて、山と谷との間を汽車はうねり行く。ハリスバーグ、アルトナ、ジョンスタウン等の市は何れも多少の人口を擁し、旅人の眼を惹く。（つづく）

花 山 だ よ り

既に北山は時雨れてゐる。赤々と燃えるストロブの傍で、松の梢を鳴らす木枯しを聞いてみると、遠くで暮進する列車の轟、続いて汽笛が一聲追ひ迫る様に「ポー」と聞こえる。花山の風の夜は、何んとか冬籠りと言つた感じである。夕食後の一と時を花山だよりでも書かうかと筆を取ると、何處からかギターの音がひびいて来る。

少し舊聞に屬するが大きな出来事と言へば先づ第一は、久邇宮若宮殿下の花山行啓を仰いだ事である。此の光榮の日は昭和八年十月28日土曜日の午後。當時相憎、山本臺長は日本學術協會の廣島總會へ出席のため御不在だつたので、上田教授が御案内申し上げる爲め定刻少し前に山へ來られる。続いて、宮殿下御在學中の京都府立第一中學校長並に職員數氏や、御學友達數名も來られる。斯くて午後2時半頃、御召自動車は本館玄関に御着。宮殿下には直ちに應接室に入らせられ、此處にて臺員一同に拜謁を賜はる。終つて臺内御一巡、先づ大赤道儀室、次いで本館露臺、此處では彗星搜索機で比叡山頂を御覽に入れる。続いて時計室、子午線館、46糎反射鏡、太陽館、天文寫眞陳列棚等を御案内申し上げ、最後に圖書室で幻燈を映寫して御覽に供した。此の間約2時間、種々の御説明をいとも御熱心に御聴取遊ばされて、5時少し前、御機嫌麗はしく御歸館遊ばされたのであつた。

11月24日は雨天であつたが突然、京大岸書記官の案内で、大阪帝大總長長岡半太郎博士が參觀に來られたので山本先生が、構内を御案内された。

吾等の公文さんが12月1日に歸つて來られた。然かも、非常時日本に適はしい否、非常時日本を背負つて立つ有爲の青年將校となつて歸つて來られた。その御祝に、翌日三島亭で公文少尉殿歓迎會が開かれた。流星觀測慰勞會を兼ねてではあつたが甚だ盛大に……。此れから暫らくの間花山はきつと戦争談に花が咲く事であらう。

（星見山人）